映像作品を作成する活動を通して自己の生き方を考える
～「ひと，もの，こと」との出合いを大切にして～

矢出　大介

総合的な学習の時間（以下文中は，総合とする）の学習は，事象を単に知識として獲得するだけではなく，「ひと・もの・こと」という具体的な対象とかかわらせる中で認識され，それを追究していく過程を通して深化していくものであると考える。子どもたちは，「ひと」との出会いを通して，ひとを好きになる心，人と出会い，かかわり合うことを楽しみに思う心が育つ。また，「もの」や「こと」を通して社会に生きる人の生き様に触れ，思いや願いを知り，社会の一員として成長していく。そして，出合うことで学ぶ意欲を高めていく，その中で学んだことを映像作品にしていく。その過程の中で，子どもたちが自分たちの学びを想起したり，より深い学びにしたりしていくことで自己の生き方を考えていく。

キーワード：魅力　追究　ひとり学習　子どものみとり　対話

１．はじめに

平成22年に文部科学省から出された「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」では，「総合的な学習の時間の改訂の趣旨を実現するためには，問題解決的な活動が発展的に繰り返される探究的な学習とすること，他者と協同して課題を解決する協同的な学習とすることが重要である。加えて体験活動 を重視するとともに，思考力・判断力・表現力等をはぐくむ言語活動の充実を図ることが欠かせない。さらには，各教科等との関連を意識した学習活動を展開することなどを踏まえ，学習指導を行うことが大切である。」と記されている。このような探究のプロセス（図１）を大切にした学びを続けた子どもたちは，深い学びにつながっていくと考えている。

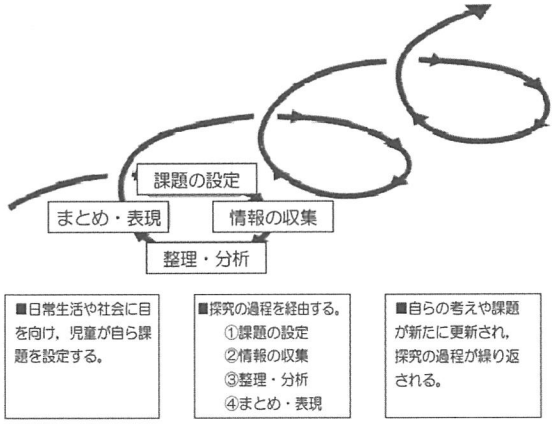

図１　探究のプロセス

このプロセスのまとめ・表現において映像作品を作成し，自己の生き方を更新するかどうかを探ったことが本研究の特徴である。

子どもたちが学び続ける意欲を高めるために「ひと・もの・こと」との出合いを大切にしている。

２　「ひと・もの・こと」との出合い
２．１．魅力ある人との出会い

図２　ゲストティーチャーと給食を食べる子ども

課題設定において，人との出会っていく中で，子どもたちが自ら追究したくなる課題になっていく。魅力ある人に出会うことで「自分もこうなりたい」「自分ももっとがんばりたい」「大人になったらこんなことをしてみたい」など，その人を通して自己を見つめ，課題を自分のものに考えることができるからである。

また，子どもにとって魅力ある人との出会いは，今後の学びに大きな影響を及ぼしてくれる。その人とのかかわりから情報収集することもある。また，思いを寄せていくことで，整理・分析やまと

め・表現をする上での意欲を高めてくれる。
このような出会いをより効果的にするには，指導者になってもらえるような人との最初の出会いがとても重要だと考える。

教師が子どもに一方的に「この人と会いましょう」というのではなく，何か問題が起こったり，子どもたちだけでは解決が難しい壁に当たったりした時に，魅力的な人と出会うチャンスになる。疑問や問題を解決するためには，どうすればいいのかを投げかけ，子どもたちの中から，この人に聞きたい，このような人に聞きたいと声が上がってきてから，その人に出会わせる。自分たちが望んできてもらった人との出会いは，子どもの学ぶ意欲を高めてくれる。

また出会った時には，子どもたちがその人に興味をもったり，好きになったりすることが大切になる。興味をもつために，できるだけ積極的に関わるように支援する。授業だけではかかわりが難しい子どもも一緒に食事をしたり（図２），遊んだりするとその人に興味をもち，好きになっていく。そのことにより，子どもの学ぶ意欲は高まっていく。

図３　自分の学びを可視化・共有化

２．２．体験の伴った地域教材

子どもが本気になって課題追究をするためには，教材が地域教材であることが大きな要因の１つである。地域教材は，まさに子どもたちの生活に密接していたり，これから密接したりすることができる可能性がある。

地域教材では実感が伴った「ひと・もの・こと」と出合うこともできる。インターネットや本だけの知識ではなく，実際に自分の目で見たり，話を聞いたり，心で感じることもできる。

五感を使って学んでいくことが可能なので，それぞれの子どもによって学んだことが多様になる。そこには，これまでの子どもの生活経験の差が出てくる。自分と友だちの考えを比べて聞くことが楽しくなる。多様な考えが出るので課題設定についても自分の思いを伝え合うことができる。

地域教材は学んだ経験を共有化・可視化することが容易である。自分たちの学んだことを，自分たちで模造紙にまとめていった。（図３）

自分たちで学んだことを整理することで，さらなる情報収集の意欲を高めたり，自分の考えを表現したりするときの支援になった。

図４　森林体験をする子ども

今回，紀州材について学んでいった。紀州材は自分たちの身の回りにあるにも関わらず，身近な存在ではなかった。しかし，森林体験をしたり，（図４）紀州材に関わる人たちと出会ったりすることを繰り返し，学びを深めることができた。

ほんまもんにふれながら学ぶことができるのも，地域教材の魅力の１つだと考える。

３．映像作品での表現を通して成長する

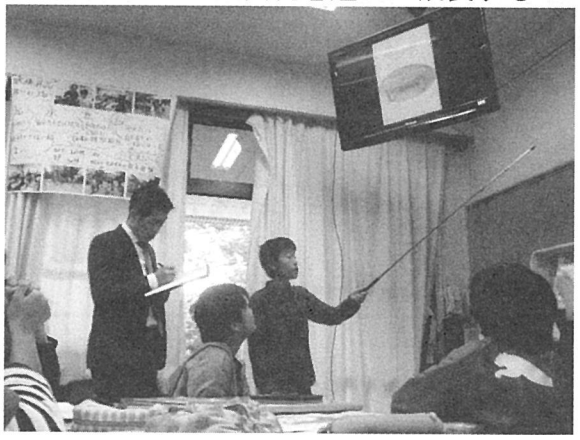

図５　自分たちの考えを伝え合う

子どもたちは体験したことについて話し合い課題を決め，追究していった。その中で，多くの人と出会い，自分たちの学んだことを多くの人に伝えたいと考えるようになった。話し合いの中で，紀州材のことをあまり知らない人に伝えたいと

考えるようになった。そして，映像作品を通して自分たちの学びを表現することになった。
自分たちの学びを伝える相手を話し合うことでこれまでの学びを整理・分析することができた。整理・分析する中で，自分たちが伝えるべきことは紀州材の現状や課題を多くの人に知ってもらうことと，紀州材のために努力してきた先人の思いを未来に受け継ぐことだと共有化することができた。そして，そのことを伝えるためにひとり学習によって情報収集をしていった。映像作品で何を伝えるべきなのかを話し合うことで情報収集の必要性，目的意識，相手意識をもって取り組むことができた。友だちと話し合いをすることで教材を身近に感じることができた。伝えたいこと撮影する（写真４）ためには，情報を精選する必要があったので，これまでの学びを振り返ることができた。そして，作成した映像をみんなで見ることは，自分たちの学びを可視化・共有化をすることになった。映像を見ながら話し合うことで，新たな課題を見つけ，もう一度情報収集，整理・分析することにつながっていった。

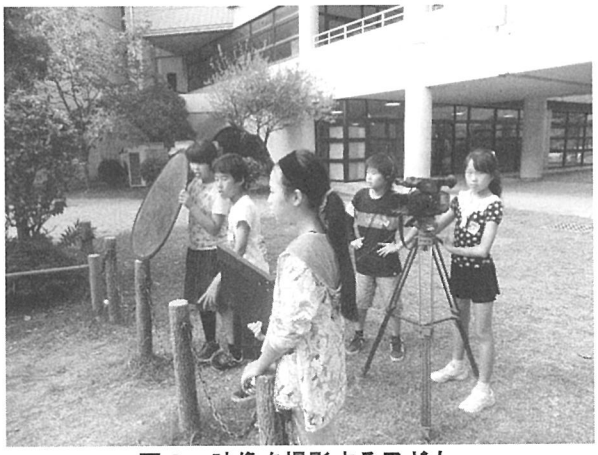

図６　映像を撮影する子ども

４．総合でめざす子ども像

課題を自分のこととして捉えて進んで調べようとする子ども

課題に対して，紀州材に関わっている人たちの思いに寄り添うことで，自分のこととして考え，課題に向かって調べ学習を行う。

いろいろな人とかかわる子ども

課題解決のために出会う人たちに自らの考えや疑問を伝えることができ，まとめたことを話し合ったり，周りの人に発信したりすることにより，新たな課題を見つけることができる。

５．授業実践　紀州材元気プロジェクト

５．１．　単元目標

和歌山の紀州材を取り巻く問題を解決しようとする活動を通して，多面的に追究する方法を身に付け，そこにある問題を主体的に見出し，仲間と協力して問題を解決するとともに，自己の生き方を考える。

５．１．本実践の主張点

和歌山の紀州材を取り巻く課題について単元の終末の姿を具体的にイメージして話し合うことで，自分の考えを深めることができる。

子どもたちが社会でたくましく生きるためには，さまざまな場面で自分の思いを伝えることが大切だと考える。地域の人やその道の専門家と出会うことで，今まで知らなかった事実を発見したり，その人たちの真剣な取り組みや生き方に共感したりして，自分にとって一層意味や価値のある課題を見出すことができる。本単元では，「和歌山の森林の未来はどうなるのだろうか」という課題について，紀州材に関わっている人たちに出会うことにより，問題意識はより一層深まると考えている。子どもたちが，出会う人たちから学んだことを大切にして課題に向かって本気で調べ学習をする中で，自分の生活や生き方と結び付けて願いをもって何かをすることの魅力を深まったと考えている。

５．３．単元計画　全 25 時間

- 森林体験
- 森林体験の学びを話し合い，課題を決める。
- 和歌山県の林業振興課の人とＭ林業のＮさんの話を聞く。
- 林業振興課とＮさんの話で気づいたことを話し合う。
- 建築資材として紀州材を使用している設計士Ｔさんの話を聞く。
- 林業従事者Ｔさんの話を聞く。
  学んできたことをもとにみんなで話し合う
- 映像作品関係のプロの人に映像の撮影方法を教えてもらう。
- 今までの学びを振り返り，自分の考えをまと

める。
・自分たちが一番伝えたいことは何か話し合う
・映像作品を作成していく
・プロの写真家に映像作品を見てもらい，作品の作り方を教えてもらう
・課題解決のために活用した映像作品について話し合う
・映像作品を作成する
・映像作品について話し合う
・映像作品を作成する

5．4．評価規準

【よりよく問題を解決する資質や能力】
和歌山の森林を取り巻く問題について，目的や相手に応じて自分が伝えたい情報を取捨選択してまとめ，伝えようとしている。

【学び方やものの考え方】
和歌山の森林の現状を知るために，目的や相手に応じて，調査方法，記録の仕方などに留意しながらそれらを用いて調べている。

【主体的，創造的，協同的に取り組む態度】
身の回りにある森林について，既有の知識と共通体験を通して得た気付きの違いなどから和歌山の森林に関心をもち，現状を考えようとしている。

【自己の生き方】
和歌山の森林の現状を知り，自分ができることを考えている。

5．4．1．授業記録

けん：僕は，紀州材はこんなにいいのにあまり売れていないのっておかしくない。
ゆき：自分たちもそうだったけど，やっぱり紀州材のことを知らなかったら，どんな木でもいいと思うのかも。
たけ：確かにそうかも。
けん：それじゃあ，今作っている映像には，紀州材で勉強したことを伝えているけど，ほんまにこれで伝わるんかぁ。
ゆき：体験したり，Tさん達に出会ったりしたからこそ言えることってないかな。
けん：それは，小学生のぼくたちにしか言えないことがいいと思う。
しん；言っていることは何となく分かるけど，それってどんなことかな。
教師：しん君の言う通り，それってどういうことなのかみんなで考えてみようか。

6．考察

映像作品を作成することを学びのゴールにしたことで，子どもたちが自分たちの学びを可視化・共有化をすることができた。それにより，もっと考えなければいけないことも見えてきた。授業記録にしんの発言により，子どもたちはもう一度自分たちの学んできたことを振り返ることになった。これまでの学びをみんなで共有化してきているので，振り返るべき目標もはっきりしていた。

子どもたちは，これまで学んできた掲示（図３）を見たり，自分のノートを見たりしながら話し合いを行った。

なんども振り返ることで，出会った人の思いに寄り添い，自己の生き方を考えることもできた。

7．成果と課題

成果としては，「ひと・もの・こと」の出合いを大切にして，学びを進めていったことで課題追究をする意欲を高めていくことができた。学んだことを映像作品にして多くの人に伝えることを学びのゴールにしたことで，何度も繰り返し情報集，整理・分析，まとめ・表現を意欲的にできた。

そして，自分たちが作成した映像作品がふるさとわかやま学習大賞奨励賞を頂いた。子どもたちは，知らなかったことを知る喜びだけでなく，自分たちの学びを伝えることの価値を実感した。

課題としては，映像作品の撮影には技術が必要だった。撮影の技術の視点での話し合いもあり，伝えるべき内容を深めることが難しかった。紀州材を学んでいき，映像作品を作成する単元構成だった。映像作品を１つしか作成しなかった。完成した映像作品を第三者に見てもらったりすることで，もう一度作りなおさないといけないと考えるような単元構成をすべきだった。そうすることで，今回以上にダイナミックな探究のプロセスのもとで深い学びができたと考える。そのためにも6 年間を見通したカリキュラムを構築することでどのように学んでいくのか探っていきたい。

参考文献

・文部科学省（2010）
「今，求められる力を高める総合的な学習の時間の展開」（小学校編）東洋館